

チュービンゲン大学同志社日本研究センター 創設30周年を迎えて

EUキャンパス支援室長
和田 喜彦

はじめに：友誼あふれる交流の歴史

チュービンゲン大学（正式名称：エバーハルト・カール大学チュービンゲン）は、1477年に設立されたドイツで最も歴史ある大学の一つである。理学、医学や薬学などの自然科学だけではなく、哲学やプロテスタント神学研究においても有名で、天文学者のケプラー、ドイツ哲学の最高峰であるヘーゲルやシュリング、詩人のヘルダーリンなど数々の優れた人物を輩出している。

チュービンゲン大学は、2023年度の THE 世界大学ランキングでは86位にランクイン、ドイツの大学全体の質を向上させることを目的としたエクセレンス・イニシアティブにも選ばれ、まさに世界最高レベルの研究推進を担う、ドイツ屈指の総合大学である。

本学とチュービンゲン大学との関わりは1990年の学術交流協定の締結に始まる。1993年にはチュービンゲン大学同志社日本研究センター（Tübingen Center for Japanese Studies at Doshisha University、以下、TCJS という）*（文末注）をヨーロッパの大学では初の日本拠点として同志社大学に開設した。1993年10月に第1回目の学生が来日し、日本語と日本文化に関するプログラムが開始、以降 TCJS は800人以上のチュービンゲン大学の学生を日本に迎え入れており、今もなお日本研究の専門家、世界で活躍する有為の人材を輩出し続けている。

一方で本学は2017年に本学初の海外キャンパスである同志社大学チュービンゲンEUキャンパスを開設した。翌2018年には同志社大学チュービンゲンEUキャンパス開設記念シンポジウムを開催、2019年からはドイツ語・異文化理解EUキャンパスプログラム等の教育プログラムを開始、Doshisha Week や国際シンポジウム等の研究関連行事を共催するなど、両大学の交流はますます深まっている。

2023年、TCJS は創設30周年を迎えた。これを記念して10月4日から7日にかけて、チュービンゲン大学から代表団21名を本学に迎えて、TCJS 創設30周年記念行事が

今出川校地にて執り行われた。この記念すべき行事は、本学とチュービンゲン大学との一層の連携と未来への展望を共有する素晴らしい機会となった。

本学主催の祝賀行事の企画・開催： 10月4日（水）

記念行事の初日、チュービンゲン大学カルラ・ポルマン学長をはじめ、モニーク・シェーア副学長、カリン・アモス副学長ら5名が植木学長を表敬訪問された。両学長は初めて対面の機会を迎え、両大学の交流と協力の歴史を振り返り、将来への希望について意見を交わし、緊密な関係を確認することができた。



ポルマン学長らによる表敬訪問

ポルマン学長は1990年にボーフム大学より古典学博士号を取得。研究者として古典学、神学、哲学、文化史、文学、受容研究などの複合領域の研究者を束ねた学際的研究を牽引してきたことが高く評価されている。世界中の複合領域分野の研究者400人以上を結集し、アウグスティヌス研究の最新の重要な研究成果とされる The Oxford Guide to the Historical Reception of Augustine を2013年に完成させるなど、アウグスティヌス研究における第一人者である。大学教授として精力的な活動をされると同時に秀でた研究業績を積み重ねてこられたポルマン学

長は2022年10月、545年間のテュービンゲン大学の歴史の中で初の女性学長に就任された。

記念行事開催の機会に合わせて、ポルマン学長の教育・研究・社会に対する多大なる功績を顕彰し、本学から名誉文化博士の学位を贈呈することとなった。贈呈の機会に合わせて名誉文化博士学位贈呈記念講演会として、10月4日(水)2講時に良心館RY107にて Augustine's Confessions as World Literature (世界文学としてのアウグスティヌスの『告白』)と題して、ポルマン学長にご講演いただいた。

講演の中で、ポルマン学長はアウグスティヌスの文学的偉業が世界的な影響を持っていることを強調し、文学の普遍性と異文化理解の重要性について語られた。講演会には120名を超える来聴者があり、学生たちは熱心に耳を傾け、講演後には学生らとの質疑応答が盛んに行われた。参加した学生は自身の学びや研究への新たなインスピレーションを受けることができたようであった。



学生に語りかけるポルマン学長



ポルマン学長に質問を投げかけている本学大学院生

同日16時から前述のとおりポルマン学長への名誉文化博士学位贈呈式がクラーク・チャペルにてパイリンガル形式により厳かに執り行われた。テュービンゲン大学代表団からは「実に荘厳で感動的な式典であった」と賞賛の言

葉をいただいた。その後、テュービンゲン大学内のホームページでも取り上げられ、式典の様子や学位贈呈による絆の強化と交流の深化について言及があった。なお、ポルマン学長は公文書上でのご自身の肩書に「名誉博士(同志社)」を意味する "Dr. h. c. (Dōshisha)" を明記されている。



厳かに執り行われた名誉学位贈呈式

協定の調印と過去10年間の交流レビュー、創設30周年記念式典：10月5日(木)

記念行事2日目となる10月5日(木)の10時から、寒梅館6階大会議室にて両大学間での教員交換協定の更新と、法学部間での学术交流協定の新規締結に係る調印式が執り行われた。これらの協定は、両大学の教育と研究の質を向上させ、国際的な視野を拡大するための重要な枠組みとなる。調印式では、両大学の学長および法学部長をはじめとした関係者によるスピーチが交わされ、一層の協力深化を誓いあった。



教員交換協定更新および法学部間学术交流協定を締結

午後からは、同会議室にて TCJS 創設以来、両大学の研究交流を築いてきた関係者が集結し、ラウンドテーブル(発表および座談会)が開催された。ラウンドテーブルでは両

大学の協力の軌跡を振り返りつつ、今後の連携強化についての展望を共有し、異文化交流や国際共同研究における課題と機会について活発な意見交換が行われた。

なお、当日は、翌日開催のリサーチ・フォーラムに登壇するチュービンゲン大学を代表する気鋭の研究者らが京田辺校地に赴き、生命医科学部、心理学部、脳科学研究科の複数の研究室を訪問した。本学教職員のみならず大学院生も著名な研究者たちを歓待し、お互いの研究成果について、活発な議論を展開した。



両大学の交流の歴史を振り返るラウンドテーブル

18時から、TCJS 創設30周年記念レセプションがホテルグランヴィア京都で開催され、京都市長、京田辺市長、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事を含む多くの来賓と両大学の学内外の関係者が出席し、TCJS の創設30周年が盛大に祝われた。

チュービンゲン大学人文学部日本学科長モニカ・シュリンプ教授の式辞では「TCJS 設立当初、いったい誰が30年続くと思っていたのでしょうか。ここまで実績と交流を重ねてこられたのも同志社大学とその関係者の惜しみない協力・支援による。感謝を陳べるとともに、引き続きの友誼を切に期待する」との発言があった。

世界トップレベルの研究者による医学・生命科学分野の研究発表：10月6日（金）

記念行事3日目となる10月6日（金）は、医学・生命科学研究に焦点をあてた研究成果を披露する一日となった。ノーベル賞受賞者11名を輩出する欧州屈指の研究拠点であるチュービンゲン大学と本学研究者、そして学外からは理化学研究所、基礎生物学研究所、京都大学の研究者が集い、「Successful Past, Envisioning the Future:

Tübingen–Japanese Collaboration in Innovative Scientific Research」をテーマに、リサーチ・フォーラムが寒梅館ハーディーホールにて開催された。「Personalized Treatments in Medicine: Current Challenges and Opportunities」、「Fe/male Brain: Sex/Gender in the Neurosciences」、「Antibacterial Infection Research in Tübingen」などの演題で、医学、生命科学分野の世界的な研究者による最先端の研究内容の発表があり、未来の科学研究についてさまざまな議論が重ねられた。

なお、ご多用にもかかわらず、リサーチ・フォーラムの司会を務め、本学の最新の研究成果を報告くださった理工学部長・理工学研究科長 白川善幸教授、生命医科学部長・生命医科学研究科長 廣安知之教授、およびパネルディスカッションに登壇された生命医科学部 池川雅哉教授には、チュービンゲン大学に代わり、重ねて感謝申しあげたい。



熱を帯びるパネルディスカッション

ワークショップと フェアウェルディナー：10月7日（土）

記念行事最終日の10月7日（土）には、以下の4つの異なるテーマを探究するワークショップが寒梅館6階大会議室および寒梅館地下 A 会議室にて開催された。

- The Institutional and Cultural Contexts of Gender Studies: Challenges and Strategies (ジェンダー研究の制度的・文化的背景：課題と戦略)
- Sustainability and Knowledge: Traditional and Modern (持続可能性と知識：伝統と現代)
- Japanese Language Education (日本語教育)
- Metaphor, Allegory and Truth: Interreligious and Intercultural Perspectives (隠喩、寓話、真理：宗教間と異文化間の違いを凌駕する視点)

ワークショップには、本学の教員も多数参加し、異なる視点からの議論や意欲的な意見交換が行われ、新たな洞察と理解が生まれることになった。特に、ジェンダー研究や社会の持続可能性に関する議論においては、現代社会における重要な課題について深く考察することができた。また、日本語教育のワークショップでは、チュービンゲン大学における日本語教育の歴史を振り返るとともに、実際に教材を作成した研究者グループによる発表を受けて、学生への教授方法に対する実践的な取り組みを紹介しあう一幕もみられた。Metaphorのワークショップでは、ポルマン学長も参加し、隠喩を持つ普遍的な意義について活発な議論が交わされた。本学教員より新島襄が用いた隠喩も披露され、隠喩が文化や宗教の違いを越えて、真理の探究を促進するために広く活用されていることが明らかにされた。ワークショップ終了後も熱心な議論が続くなど、両大学および関係の研究者にとって有意義な交流機会となった。

最後に、代表団とワークショップ参加者を中心にフェアウェルディナーが実施され、今後の協力体制の確認と再会を約束して、行事の全日程を終えた。



様々な研究分野で得られた知見を共有するワークショップ

おわりに

同志社大学として、またEUキャンパス支援室長として、TCJS創設30周年に祝意を表するとともに、長きに渡るTCJSの運営に携わってこられたチュービンゲン大学関係者へ深い敬意を払いたい。

30年を超えるチュービンゲン大学との連携は、両大学が緊密な関係で結ばれてきたことの証左であり、本記念行事での協働は両大学による未来への新たな一歩を踏み出す契機となった。チュービンゲン大学長、副学長を含む21名の代表団との密接な交流を通して、両大学の特別な友人

(Special Friends) としての関係が一層深まったことを実感している。特にミヒャエル・ヴァフトウカ TCJS 所長、チュービンゲン大学国際研究協力推進部のカリン・モーゼ v. フィルセック氏のお二人には、本記念行事の企画・準備・運営・広報等の面で多大なご尽力をいただいたことを銘記しておきたい。

TCJS30周年記念行事が成功裏に終わったことについて、ポルマン学長、代表団から本学側の協力・支援に対して厚い感謝の言葉をいただいている。この成功は、期間中にハリス理化学館でEUキャンパス特別写真展を同志社社史資料センターが開催してくださるなど、多くの教職員の皆様が積極的に協力くださったおかげで成り立ったものである。同志社創立150周年を迎える2025年には本学とチュービンゲン大学との共催で国際シンポジウムを開催する予定であり、その後も定期的に研究交流、学生・文化交流を続けていく。チュービンゲン大学との学際的な協力が、グローバル人材の輩出を目指す本学において貴重な機会となることを確信している。今後とも、両大学の関係を一層強化する所存であり、皆様のさらなるお力添えとご支援をお願い申しあげたい。

(わだ よしひこ)

*…創設当初はチュービンゲン大学同志社日本語センター。同センター創設20周年の2013年に、名称を「チュービンゲン大学同志社日本研究センター」と改名して現在に至る。